虹（にじ）

里山の新しい家族像

⑫172 富山初のパートナーシップ宣誓

パートナーシップ宣誓制度を最初に利用した遠藤さん（左）と佐藤さん

夏の夕日が照らす田んぼの向こうに、黒い瓦屋根の木造住宅が並ぶ。奥には山林が広がる。深い緑色の階調がすがすがしい。

「ムーミン谷みたいでしょう。この景色が気に入ってここに住みました」

狭い坂道でマニュアル車を運転しながら、遠藤優子（えんどうゆうこ）さん(43)は説明する。氷見市久目地区は木々と水田に恵まれた山里だ。

遠藤さんは９年前からパートナーの佐藤文敬（さとうふみたか）さん(44)と久目で暮らす。家事のほとんどは佐藤さんが担当する。佐藤さんは「料理といってもいつも同じようなものばっかりですよ」と照れくさそうにする。掃除はどちらも苦手だという。家の前には雑多な農機具が所狭しと並ぶ。犬もニワトリもいる。

２人は事実婚のカップルだ。遠藤さんは佐藤さんを「サントスさん」と呼び、佐藤さんはそのまま「遠藤さん」と呼ぶ。表札には「Ｓａｔｏ　Ｅｎｄｏ」と２人の名字がそのまま隣り合う。

２人は３月に施行された県のパートナーシップ宣誓制度の最初の利用者。「第１号」として当日のニュースの顔になった。

◇

田んぼを目の前にして暮らす遠藤さんは、かつて都会のビル群に憧れた。キャリアウーマンになりたかった。地元の小矢部から東京の大学に進学した。

東京はすぐに嫌になった。無数の人が行き交うのに誰も自分を必要としていない。東京は自分の居場所ではない気がした。

就職したのは、北関東の専門学校だった。世界各地で農業の指導者になる人材を育成する学校だった。

佐藤さんは宮崎県出身。保守的な考え方が根強い地域で育った。例えば、年長者の発言権が強い。佐藤さんも少年時代、１日でも遅く生まれた同級生を呼び捨てにした。そんな自分に違和感を覚えていた。

違和感の正体を教えてくれたのが、大学の社会学の授業だった。目には見えない固定観念や社会規範が人々を抑圧する。人種や性別、年齢などの属性による差別を生み出す。その構造に自分が加担したくないと心底思った。環境問題にも関心が強く、卒業後は農業関係の出版社に就職。自給自足の暮らしを夢見て職を転々とした。

2011年。東日本大震災が起こった。佐藤さんも遠藤さんも当時の仕事を辞め、次の身の振り方を考えているタイミングだった。それぞれ被災者支援のＮＰＯに入り、宮城で出会った。救援物資を配り、福祉施設の泥出しの作業をする中で惹（ひ）かれ合った。

任期が切れる頃、遠藤さんは佐藤さんに質問した。「私たち、この後どうするの？」。佐藤さんは「一緒にいればいいんじゃない？」と言った。遠藤さんは「一緒にいるって結婚するの？」と踏み込んだ。佐藤さんの答えは予想外のものだった。「法律婚はしない。でも、一緒にいよう」

遠藤さんは混乱した。結婚して名字を変えることが当たり前だと思っていた。交際中には「佐藤優子という知り合いにもいそうな名前になるんだ」と想像したこともある。しかし、それは実現しないらしい。

佐藤さんから夫婦別姓について分かりやすく解説した本を手渡された。半信半疑で読んでみると、腹に落ちた。日本では、婚姻時に男女どちらかが生来の姓を変える必要がある。しかし、改姓をするのはほぼ女性だ。男女平等の観点からは遠い。さまざまな面倒な手続きをこなしても離婚して旧姓に戻せば、また煩雑な目に遭う。結婚後にどちらかの姓を選択せざるを得ない国は先進国では日本だけだ。今まで当たり前だと思っていたことが揺らいで見えた。

「結局、ブレインウオッシュ（洗脳）されました」と遠藤さんは笑う。幸い、遠藤さんの両親も受け入れてくれた。ただ佐藤さんの父は「籍も入れず、式もやらないのか」と怒った。レストランでパーティーを開くことで納得してもらった。

◇

佐藤さんは雪国でストーブやかまどを使った暮らしをしたかった。自給自足につながる生活スタイルで、ずっと憧れていた。まき割りも好きだ。まきが得られるという目算もあり、山仕事をしたかった。遠藤さんが育った富山は雪国だ。山林が集落から近い久目を２人の定住の地に選んだ。

遠藤さんは氷見市の職員になった。ただ安定した身分を求めたわけではない。被災地の活動で、自治体職員の活躍を目の当たりにした。ボランティアも国家公務員も市町村の職員を頼りにしていた。地方で生活するならやってみたい仕事になっていた。

久目で手頃な家を探していると、「家を譲る」という人に２人も出会った。どちらも資産価値が乏しく、跡継ぎがいない古い家の処分に困っていたらしい。使える家を朽ち果てさせるのは忍びない。両方もらった。すると、近所で「あの人たちは家をもらってくれる」とうわさになった。同じ悩みを抱える人がたくさんいたのだ。

「夏の声」広田 郁世

頼まれるままに、家を譲り受けて多い時には７軒所有した。手弁当で修理して、移住者に貸し出した。決してお金にならない。手出しの方が多い。しかし、地域がにぎやかになれば自分たちのためにもなる。

「変なやつらが古い家をやたらと集めているぞ」と怪しまれ、町内の集まりに呼び出されることもあった。佐藤さんは「変わりものなのは間違いない。僕も地元の人だったら気になる」と笑う。

それでも地域になじんだ。移住者を連れて町内会長の元に一緒にあいさつに回った。家の修繕を手伝ったり、消防団などの役回りを買って出たりした。

近所の人たちからは「佐藤？　遠藤？　どっちで呼べばいいの」と困惑されることはあったが、事実婚で困ることといえばその程度だった。そして県がパートナーシップ宣誓制度をスタートすると知った。制度は同性婚のためのものというイメージが強いが、事実婚のカップルも対象に含んでいた。２人も宣誓を決めた。

◇

遠藤さんは友人の縁で性的マイノリティーの支援団体に関わっていた。関連する取材をテレビ局のスタッフから受けた際、「制度が始まっても、取材を受けてくれそうな人がいないらしい」と耳にした。

性的マイノリティーへの偏見は根強くある。祝福する人もいれば、いらぬ詮索をする人もいる。顔や名前を明かして取材を受けることに抵抗感を覚えるのは仕方ない。

自分たちが事実婚の当事者であることは、身近な人なら皆知っている。今さら隠すものではない。制度は同性婚や夫婦別姓を求めて活動してきた人たちの努力が結実したものでもある。何もしていない自分たちが前に出るのは恐れ多い。しかし、制度が周知されるならば、意味はある気がした。

「第１号」として県庁で手続きした。気軽に取材を引き受けたが、30人近い報道陣に囲まれて２人とも冷や汗をかいた。

一緒になったのはずいぶん前のことなのに、たくさんの人に祝福された。花束までもらった。「私たちは客寄せパンダ。こんな選択肢もあると知ってもらえればいい。血縁にも名前にも頼らない新しい家族像を示したい」。実際に「この制度を使いたい」という声が知人から届いた。

今年、２人が暮らす久目地区が県の移住者受入モデル地域に指定された。地域が補助金を使い、空き家を調査できるようになる。２人が空き家を貸し出し、移住者を積極的に受け入れていることも、大なり小なり影響したのだろう。佐藤さんは「僕たちがいることで久目で暮らしたいという人のハードルが下がるのならそれでいい」と言う。

往々にして世の中を前進させるのは、変わり者とよそ者だ。氷見の山里には少なくとも２人はいる。

パートナーシップ宣誓制度に基づき発行される受領証があれば、２人の関係を簡単に説明できます。親族との同居が原則の公営住宅に入居でき、公立病院での面会や病状説明といった場面でも活用できます。佐藤さんと遠藤さんが「第１号」として各メディアの取材を受けたことで制度を知った人も多いでしょう。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は９月１日（金）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局